



本堂



2階参拝所

ルショップを始めた。そんな頃、ある姉妹から引越の依頼が入る。

「こっちの荷物は私の東京の家に。こっちの荷物は妹の横浜の家に運んで」

姉妹は関西に両親を残し、東京と横浜に嫁いだ。やがて母親が亡くなり、実家に独りで暮らしていた父親が亡くなったため、その葬儀を終えたところだった。姉妹はそれぞれの家に戻るため、とりあえず両親の荷物を今の家に運んでから、便利屋などを探して処分するつもりだった。

吉田氏は「うちで整理しましょうか?」と申し出る。すると「こんな大変な時にありがたい」と喜ばれたという。

「その時調べたら、遺品整理をしている会社はありませんでした。きっとこの姉妹のような人たちが利用するはずと思い、早15年が経ちました。現在は全国で8ヶ所で事業を展開しています」

好評に反して吉田氏は、「3年で辞めようと思った」という。

「昔は自分たちでやれていたことを業者がやってしまう。一人暮らしの老人の孤立は、便利な世の中が招いた結果なのではないかと思ったんです。『お前がこんな商売を作ったから、誰も自分で遺品整理をしなくなったじゃないか!』と言われたら嫌だと悩んでいました」

しかし、核家族化など、生活スタイルの変化も要因の一つだ。「片付けてあげたいけどできない」「身内の荷物をゴミのように乱雑に扱われたくない」そういう遺族も少なくない。

「キーパーズに頼んだら『専門の会社なら安心だね』と言われる。きちんと供養してキレイに片付け

たら、心から感謝される。それが私たちの救いになると気付いたので、遺族のための会社にしようと思いました。

だから私たちの仕事は、『最後までちゃんとやってあげよう』という遺族がいないと発生しません。そういう思いでやってきました」

## 孤立死問題と 期限を決めることのススメ

65歳以上で、葬儀や相続について準備している人は30%程度。「自分の荷物は片付け始めている」という人は約70%にのぼったという。

「動物と違って人間はいろいろ残して死にます。だから誰かに手伝ってもらわないとキレイに死ねません。そこで大切なのが人間関係なのですが、最近人間関係が全くないという人が増えています」

その場合、誰が遺品整理をするのか。

「これからの問題は、高齢者だけでなく、若い人たちの孤立です。人口は減っても、孤立する人の割合が増える。30～40年後にはそういう時代が来ます」

吉田氏は、死に伴う様々な手続きや処理を、「誰にお願いしますか?」と問いかける。物質的死(火葬、埋葬)・社会的死(戸籍抹消、告別式)・財産的死(相続)・精神的死(宗教的儀式)・存在的死(遺品整理)。

これらの死を経て、その人の存在や証拠が消え、キレイにしてやっと「記憶の中の人」に変わるという。

「もし、自分の死期が分かっていたら、死ぬまで

## 基調講演 「遺品整理の現場(人間の生き様)から学ぶ」



吉田太一  
キーパーズ株式会社  
代表取締役

大阪府出身。1994年「トランスポート引越サービス/吉田物流(株)」を創業。2002年、遺品整理のサポートに対する必要性を感じ、全国初となる「遺品整理専門会社キーパーズ」を設立。「天国へのお引越しのお手伝い」をコンセプトに、日本各地と韓国に支店を構え、遺品整理サービスを提供している。また、設立から約8000件にのぼる遺品整理の経験から、増加傾向にある孤立死を社会問題として捉え、講演会やDVDの作成、配布など、孤立死防止のための啓蒙活動に積極的に取り組んでいる。

## 遺品整理専門会社は遺族のための会社

吉田氏は現在53歳。日本初の遺品整理専門会社「遺品整理専門会社キーパーズ」を設立して15年。遺品整理の仕事は、1年あたり現在約1700件にもなる。

「約1700件のうち、約300件は死後しばらく経ってから発見されています。一番長かった人で5年。現在日本では年に120万人以上が亡くなっているの、120万に対して約300件なら、聞いた人が教訓にできていいかもしれませんが、できればそうならない方がいいですね」

吉田氏は引越会社立ち上げ後、関西初のリサイク